

◆2022年3月第1週の礼拝 説教

■日 時：2022年3月6日（日）

■場 所：立川教会

■説教題：「第一の戒めと第二の戒めを生きる。」

■聖 書：新約 マルコによる福音書 12：28－34（p87）

■讃美歌：149「わがたまたたえよ」 303「丘の上の主の十字架」

お早うございます。

東京都に出されていた「蔓延防止等重点措置」の適用が、予定されていた今日をもって解除されず、21日（月）まで延びました。従って、定例集会は3月23日（水）の聖書研究・祈祷会からで、皆集まっの礼拝は3月27日（日）、私の立川教会最後の送別説教の日となります。

ご承知のように、この間のオミクロン株による感染者数は、前回のデルタ株による第5派とは比較にならないほど多く、又、亡くなった方も高齢者を中心にかなりの数に上っています。

次々と変異するコロナ・ウイルスとの戦いは続きますが、いつも申し上げているように、油断することなく、又恐れ過ぎることなく、生活し続けて行きたいと思います。

希望があるのは、家族の誰かが感染しても、必ずしも全員が罹ってはいない場合があることです。十全なる注意を怠らなければ感染を防げることも心しておきたいと思います。

ところで、一昨年6月、立川教会では月に一度の「青年の夕べ」が始まりました。毎週行われている夕礼拝を、月に一度だけ青年を対象にしたものにするという試みです。

きっかけとなったのは、私がこの教会に赴任して以来、ずっと親子で夕礼拝に出席されていた方が、子どもさんが立ち直ったのをきっかけに夕礼拝への出席を終わらせたいとの言葉でした。

このご家族には、本当にお世話になりました。第1回クリスマス・コンサートに際しては、録音したものを無償でCDにして配布して下さいました。

それだけではありません。料理教室に必要なほとんど全ての調理器具をアマゾンから調達して下さったり、スライドスクリーン、マイクやスタンド、スピーカーに至るまで、教会の諸活動に必要なものは何でも手配して下さいました。そして、去る時の感謝として、現在会堂の前と後ろにある空気清浄機2台を寄贈して下さいました。

福音の種は確かに蒔かれたと思います。いつの日にか、実を結ぶことを祈ります。

ところで、このことがきっかけで、夕礼拝に続けて若い人を招きたいと思い、何度か出会ったことのある友人二人に声をかけました。月に一度、私たち3人で夕礼拝を行わないかと。君たちが交替で話しをし、私は短いショートメッセージを担当すると。

彼らの同意を受けて、月に一度の「青年の夕べ」が始まりました。

ところが、始めてみて驚きました。彼らが中心となる「青年の夕べ」に、私の見知らぬ何人もの青年たちが集い始め、3で行うはずであった夕礼拝が10数名の若者の集まりとなりました。そして、クリスマスには20名を超える若者が集まりました。しかも、教団だけでなく、ホーリネスや、学校で聖書を学び、キリスト教に関心を持つ者など多彩な顔ぶれとなりました。

キリスト教会では、かなり前から若い人が教会に来なくなったと言われていました。しかし、昨年洗礼を受けた友もそうですが、真剣に福音に触れたいと思う若い人々は決して少なくないことを知らされています。問題は、教会が彼らの求めに応えることが出来ていないことです。若い人々の思いに応えるような礼拝が実現出来れば、教会は新たな時代を迎えることが出来るように思います。但し、若い人々が中心となると言っても、何でも好きなようにすることではありません。その土台に、揺るがぬ福音理解があり、それが語られていなければなりません。揺るがぬ福音理解とは、イエス様の十字架の贖いと復活への希望です。「青年の夕べ」では、私は必ずショートメッセージを語ります。土台が揺るがないためです。

さて、今日取り上げる聖書の学びは、イエス様が教えられた第一の戒めと第二の戒めについてですが、私は、「青年の夕べ」の感話によって、改めてこの問題が与えられ、多くのことを考えさせられました。

聖書を読みます。マルコによる福音書第12章28節から34節です。

28：彼らの議論を聞いていた一人の律法学者が進み出、イエスが立派にお答えになったのを見て、尋ねた。「あらゆる掟のうちで、どれが第一でしょうか。」

彼らの議論とありますが、この議論は、復活をめぐるイエス様とサドカイ派の人々との議論です。サドカイ派の人々は復活を信じていませんでした。そして、イエス様に復活の時のことを問うたのです。この議論を聞いていた一人の律法学者が、今度は自分が職業としていた600を超える掟の中で、人々が守るべき掟としてどれが最も重要であるかを問います。つまり、律法の中の律法、掟の中の掟、律法全体の土台となるべき掟とは何かを問うたのです。神から選び出された民族共同体であるユダヤ人社会において、共同体の土台となる掟は何かとの問いです。

これが、信仰共同体である私たちの教会であれば、その土台は言うまでもなく信仰告白です。それならば、神様に選ばれた民族に相応しいユダヤ社会において、守るべき第一の掟とはどの教えかの答えを、律法学者はイエス様に求めました。この律法学者がどのような意図をもってイエス様に問いかけたのか、聖書には書いてありません。しかし、その前のサドカイ派の人々の問いに対し「イエスが立派にお答えになったのを見て」とあることから、悪意ではなく、純粹に問うたのだと思います。それに対し、イエス様は答えました。29、30節です。

29：イエスはお答えになった。「第一の掟は、これである。『イスラエルよ、聞け、わたしたちの神である主は、唯一の主である。』

30：心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。』

何よりもまず、神様を愛しなさいと言うのです。そして、その愛し方は、尋常ではありません。心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして愛する。心、精神、思いと、意味する事が同じ言葉が3つ重ねられます。つまり、徹頭徹尾、全身全霊を傾けて神様を愛しなさいと言うことです。朝目覚めてから夜眠るまで、ひと時も忘れず、神様に祈り、その御心を求めて歩みなさいと言うのです。しかし、それだけではありません。心の状態を表わす3つの言葉にさらに加わる言葉があります。「力を尽くして」です。力を尽くすとは、単に心の問題ではなく、その心の思いがさらに外に向かって押し出されることです。

神様を愛する。それは、何よりも礼拝を守り、その御心を尋ね求め、示された道に生きることです。当時であれば週に一度の安息日を覚えて礼拝を守り、今であれば主日の礼拝を守ることによって御心に適う道を見出し、その道をひたすら歩むことです。礼拝から始まる1週間の旅路を終え、私達は又礼拝に戻ります。力を尽くすとは、全身全霊を傾けて礼拝を守り、そこから出発し、7日の旅路を歩み通すことを意味します。

そしてイエス様は、第一の戒めだけでなく、続いて第二の戒めとして隣り人との関わりを教えます。31節です。

31：第二の掟は、これである。『隣人を自分のように愛しなさい。』この二つにまさる掟はほかにない。」

隣人を愛する。この愛するとは、これまでも申し上げて来たように、好き嫌いの感情のレバルのことを意味しているわけではありません。隣り人の困難を自分の問題として受け止め、分かち合うことです。ですから、たとえ感情的には相容れない隣り人であっても、愛することは出来ます。その人の直面している試練や課題を知った時、それらを分かち合う時です。

さらに言えば、私は、隣人を愛するとは、選び取ることだと思います。その人の隣り人となることを選び取るのです。私達の誰もが知っているイエス様の譬え話に「善いサマリア人」の話があります。ルカによる福音書10:25-37、新共同訳聖書の126頁です。私は一度もこの箇所を取り上げてメッセージを語ったことがないので、今日は改めてご一緒に読んでみたいと思います。キリスト者の生き方を教えているからです。

【ルカによる福音書10:25-37、126頁】

このサマリア人は、日常生活で、普段から自分たちを蔑み、疎外していた、まさに敵として在り続けているユダヤ人を助けました。彼は、強盗に遭い、瀕死の重傷を負っていた旅人の隣り人となることを選び取ったのです。

この答えを聞いた律法学者は、イエス様に言います。32、33節です。

32：律法学者はイエスに言った。「先生、おっしゃるとおりです。『神は唯一である。ほかに神はない』とおっしゃったのは、本当です。

33 : そして、『心を尽くし、知恵を尽くし、力を尽くして神を愛し、また隣人を自分のように愛する』ということは、どんな焼き尽くす献げ物やいけにえよりも優れています。」

律法学者のこの答えは、見事なものでした。それは以下の二つの点においてです。

- ユダヤ社会に生きる人々の生活を、生まれた時から人生の終わりの時まで規定した600を超える戒めは、そのほとんど全てが人の目に見え、形として現れるものでした。断食をする、聖句を書いた紙を身に付けることなどです。しかし、その律法を教えることを生業（なりわい）としていたにもかかわらず、彼は、律法の根底に湛えられている命の源（みなもと）を知っていました。その命こそ、神を愛し、隣人を自分のように愛する心です。全ての律法は、この二つの戒めを土台としてこそ意味を持ち、この二つの戒めの底を流れる命を欠いた掟は、たとえそれがいかに厳格に守られようとも、神様にとって何の意味をも持たないことです。
- 第二に、今述べたこととも深く関わるのですが、イエス様が教えられた二つの戒めの重要さの比較対象を「焼き尽くす献げ物やいけにえ」としたことです。人々にとって、

600を超える律法を厳格に守る生活など出来るはずもありません。守れないことによって生じる罪を神様にいかに赦していただくか、それが献げ物の意味でした。焼き尽くすとは、その香りと煙りが天にまで高く昇れば昇るほど、罪は赦されると信じたのです。ですから、富める者たちは、羊や山羊など大きく高価な生贄を買いました。献げる時に立ち昇る香りや煙がより高く舞い昇ることによって、多くの罪が赦されると信じたからです。しかし、貧しい者は、最も安い小さな雀しか手に入れることが出来ず、焼き昇る煙も低く、罪赦されること少なくして、身を小さくしながら生きなければなりませんでした。

しかし、この律法学者は、焼き尽くす献げ物による罪の赦しと言ういけにえに対する従来の考えを真っ向から否定し、いけにえによる罪の赦しより、イエス様の教えられたその教えにこそ真理があることを告白します。

34 節。

34 : イエスは、律法学者が適切な答えをしたのを見て、「あなたは神の国から遠くない」と言われた。もはや、あえて質問する者はなかった。

「あなたは神の国から遠くない」。神の国は、あなたの近くにある。

マルコによる福音書の中で、イエス様からこれだけの賞賛の言葉を投げかけられるのは、あの「あなたは、メシアです」（8：30、p77）との信仰を告白した時のペトロを除いて、この律法学者だけです。福音書記者マルコは、イエス様の命を付け狙っていた敵対勢力である律法学者にも、このようなイエス様からの賞賛の言葉を記しました。真理は、敵味方を問わず、人の心に届くことを記したのだと思います。

以上が、今日与えられた聖書の箇所からの学びです。

ところで、私達の現実の信仰生活からみて、この二つの戒めについて考えたいと思います。この律法学者のように、イエス様から賞賛されるような信仰生活を送っているかどうかです。問い返すことは次の二つ。一つは、

- 第一の戒めとして、この1年、コロナ禍にあって、教会はもとより、家にあってもオンラインでの礼拝が守れたかどうか。
- 第二の戒めとして、困難な課題を抱える隣人を選びとって歩んだかどうか、あるいは、今なお歩んでいるかどうかです。

神様が、私達に常に問うているのは、この第一の戒めと第二の戒めを生きることであり、それに尽きるのです。祈りましょう。